渋沢敬三略年表

西暦	年齢	主な出来事	備考
1896	0	明治29年8月25日、東京深川で、渋沢篤二、敦子の長男として生まれる	第1回夏季オリンピック
1915	19	渋沢同族株式会社設立、同社長就任	
1915-1916	19-20	生物学を志望するも、実業界入りを半年以上にわたり栄一に懇願される。大正5年、栄一、喜寿に達し実業界引退	
1921	25	東京帝大経済学部卒業。横浜正金銀行に入行	
1922	26	登喜子（父・木内重四郎、母・磯路）と結婚 横浜正金銀行ロンドン支店転勤	ワシントン海軍軍縮条約
1925	29	長男・雅英誕生。横浜正金銀行退職	普通選挙法
1926	30	澁澤倉庫取締役・第一銀行取締役・東京貯蓄銀行取締役に就任	大正から昭和に改元
1929	33	癌研究会理事に就任	世界大恐慌
1930	34	魚介養殖取締役就任	ロンドン海軍軍縮会議
1931	35	東京貯蓄銀行会長に就任。栄一永眠により子爵襲爵	満州事変
1932	36	第一銀行常務取締役就任。父・篤二永眠	五・一五事件
1940	44	日本農学賞受賞	
1941	45	全国貯蓄銀行協会会長に就任。第一銀行副頭取に就任	太平洋戦争開戦
1942	46	日本銀行副総裁就任。これに伴い第一銀行など辞任	ミッドウェー海戦
1944	48	日本銀行総裁就任。総裁時代一度も東京を離れず	東条内閣総辞職
1945	49	貴族院子爵議員に当選。日本民族学協会会長就任（理事長兼務） 内務省顧問となる。幣原喜重郎内閣の大蔵大臣に就任	太平洋戦争終戦
1946	50	幣原内閣、インフレ対策として新円切替発表 幣原内閣総辞職。公職を追放される	日本国憲法公布
1947	51	第1回六学会連合大会を会長として開催。畑作りに専念	日本国憲法施行
1948	52	文部省に庶民資料館設置を推進	
1949	53	日本生物化学研究所取締役に就任。水産資料館設置推進	
1951	55	追放解除	サンフランシスコ平和条約
1952	56	貯蓄増強中央委員会会長に就任	
1953	57	沖縄戦災校舎復興後援会会長就任 国際電信電話株式会社取締役社長就任	テレビ放送開始
1954	58	ICC（国際商業会議所）日本国内委員会議長に就任	
1955	59	渋沢栄一伝記資料刊行会より『渋沢栄一伝記資料』刊行開始	
1956	60	株式会社文化放送設立、会長に就任	国際連合加盟
1957	61	外務省顧問に就任	
1963	67	昭和37年度「朝日賞」文化省受賞。東洋大学より文学博士の名誉学位を受ける。勲一等瑞宝章を授与される。10月25日永眠	

銅像の場所：【渋沢栄一像】
（深谷市役所：深谷市仲町 11-1）
※他に、深谷駅前、旧渋沢邸「中の家」、渋沢栄一記念館にもあります。）
【渋沢敬三像】
（旧渋沢邸「中の家」：深谷市血洗島 247-1）

発行：深谷市
令和 8 年 2 月 13 日

立志と忠恕の後継者

渋　沢　敬　三

Shibusawa　Keizo

深谷に移設された銅像

旧渋沢邸「中の家」では青森から移設された「祭魚洞（さいぎょどう）渋沢敬三先生像」（祭魚洞：敬三の雅号）を見ることができます。作者は彫刻家の西常雄（にし つねお）で、東京美術学校に学び多摩美術大学教授を務めました。穏やかな笑顔をたたえる敬三像は、平成７年（1995）に制作されたオリジナルな作品で、還暦頃の敬三の姿を表しています。また、深谷市役所には、平成６年（1994）に制作された「青淵渋沢栄一先生像」が、敬三像と同時に移設されました。作者は「東洋のロダン」と称された彫刻家の朝倉文夫（あさくら ふみお）で、日本銀行本店にほど近い常盤橋公園の「青淵渋沢栄一像」と同じ姿です。

２つの銅像が建てられていたのは、青森県の古牧（こまき）温泉です。青森と渋沢家とのつながりは、栄一が頭取を務めた第一国立銀行の盛岡支店八戸出張所を廃止した際、「三本木（さんぼんぎ）共立開墾会社」から担保した株券を見つけ、予約開墾地と共に預かり、明治23年（1890）に「三本木渋沢農場」を設立したことにはじまります。農場では、農場長を雇って、入植者と馬の牧畜や林業などを進め開拓を行い、栄一も明治28年（1895）と明治41年（1908）に農場を訪れています。敬三は、大正４年（1915）から渋沢農場を引き継いだ後、三本木原開墾の国営事業化を目指した地域活動の支援を行います。戦後、農地改革に伴う農地解放等により渋沢農場を閉鎖することとし、その事業清算を杉本行雄（すぎもと ゆきお）に任せました。

杉本は、渋沢家の書生として住みこみ、戦中から戦後にかけて、敬三の秘書として仕事を手伝った人物です。渋沢農場の解散のため、敬三の要請により青森県に移住後、温泉の掘削にも成功、東北の観光拠点・古牧温泉を創り出し、株式会社古牧温泉渋沢公園や十和田観光開発株式会社を設立するなど観光施設を整備し、「北の観光王」とも呼ばれました。

杉本に対する敬三の信頼は非常に厚く、栄一の三十三回忌の際、病床にあった敬三は、法事を取り仕切ることを涙をこぼしながらお願いしたといいます。三十三回忌より前に敬三が亡くなったため、結果的に敬三の葬儀も杉本が取り仕切ることになりました。

平成３年（1991）、杉本は古牧温泉のホテル敷地に東京三田綱町（みたつなまち）の旧渋沢邸を移築しました。当時、老朽化に伴い取り壊しが検討されていたものを、杉本が国に払い下げを願い出たものでした。そして、近くに敬愛する栄一と敬三の銅像を建立しました。杉本が亡くなった後、会社は景気低迷の煽りから経営破綻し民事再生法により外資による事業再生を経て、現在まで株式会社三沢奥入瀬（みさわ おいらせ）観光開発が事業継続するとともに温泉旅館を営業しています。そして、令和５年（2023）、旧渋沢邸は清水建設株式会社（東京都江東区）の敷地へ移築され、令和７年（2025）、２体の銅像は寄附により渋沢ゆかりの深谷市へ移設されました。

渋沢栄一像（深谷市役所）
高さ7.3m（銅像3.4m）、重さ29.1ｔ

渋沢敬三像（旧渋沢邸「中の家」）
高さ4.9m（銅像2.2m）、重さ23.4ｔ

※ *印の写真は「渋沢史料館」所蔵

埼玉県深谷市

立志と忠恕の後継者　渋沢敬三

渋沢敬三は明治29年（1896）８月25日、東京深川で、渋沢篤二、敦子の長男、渋沢栄一の嫡孫として生まれました。祖父・栄一は"篤""敬"の二字を好み、父子にその一字ずつを採って命名します。敬三は、身体は丈夫で創意に富み、指導力のある少年でした。近所の子どもを集め「腕白倶楽部」という会を組織して『腕白雑誌』などという雑誌を刊行し、「動物アカクマアリ」という蟻の詳細図入り解説などを載せています。知人友人は、学生の時分から日銀総裁、大蔵大臣となっても「欲のない人」と、敬三のことを評しました。敬三自身「自分はお金のことには全く無知で、ことに自分のお金となるとやりきれないほど馬鹿だ」と述べています。しかし、敬三は金銭に関して「欲のない人」でも、決して無欲ではありませんでした。それでは何に対する欲を持ちえたかといえばそれは「学問に対する欲」でした。中学生のころから「金魚の音に関する知覚の一観察」など自然科学系の論文を書いては同級生に見せており、当然本人は高等学校では理科を選び、大学も理学部へ進もうと考えていました。ところが祖父渋沢栄一から待ったがかかりました。将来、銀行を受け継いでもらいたいので、高校は文科へ進んでほしいと言われるのです。栄一は若い孫に誠心誠意懇情しました。後年「おじいさんはただ頭を下げて頼むというのだ。七十いくつの老人で、しかもあれだけの人に頼むと言われるとどうにも抵抗のしようがなかった」と語っています。

明治32年（1899）敬三2歳の頃※

中学校卒業と同時に栄一の後継者となり、栄一には特別に大事にされました。大切な跡取りであり、将来家の柱となっていくべき存在です。栄一は忙しい中でも敬三を昼飯に誘い、ビフテキやアナゴの天ぷらなど食べに行き、若い孫の健啖ぶりを見て喜んでいたといいます。大正15年（1926）に敬三が第一銀行に入行すると、実質的に栄一の側近としての仕事が多く、必要とあれば代理もこなしました。また、獅子舞の時期に栄一に随伴し、たびたび血洗島を訪れています。栄一亡き後も単独で訪れ、栄一の里帰りを引き継ぎました。

昭和4年（1929）12月19日、昭和天皇より単独御陪食に招かれた栄一に随伴※

昭和６年（1931）に栄一が亡くなると、子爵家を襲爵します。戦中、戦後は日銀総裁や大蔵大臣の重責を担い日本の金融財政の舵を取り、昭和21年（1946）幣原内閣総辞職、その後公職を追放されます。同時期に財産税として自邸を物納しました。財産税により家の経済状況も厳しくなりましたが、「ニコニコしながら没落していけばいい。いざとなったら、元の深谷の百姓に戻ればいい」　と言って平気な顔をしていました。昭和38年（1963）10月に亡くなりますが、その直前に勲一等瑞宝賞が授与されました。

日銀総裁や大蔵大臣を務めながら同時に日本民族学協会会長にも就任していた渋沢敬三。敬三の67年の生涯で残した足跡は戦後の日本の礎となりました。

文化人としての敬三

敬三が生まれた、東京深川の邸内には「潮入りの池」と言われる池がありました。東京内湾につながっていたため潮の干満があり、それによって様々な魚や小動物が生息しており、幼少期から少年期にかけての敬三は、この池の傍らで飽きずにじっと眺めていました。敬三にとって庭の水族館であり、生物学志向の原点でした。仙台の第二高等学校卒業後東京へ戻った敬三は、邸内にあった物置小屋の屋根裏部屋に目を付け、そこを「アチックミューゼアム」と名付け、生物の標本や郷土玩具などの民具を陳列しました。「アチック」には多くの仲間が集まり、敬三は学問に情熱を傾けながらも自らを一経済人とし、宮本常一をはじめ同じく情熱を持つ若き研究者を支援し続け世に輩出し、財界と学術界の橋渡しを担っていました。

また、民俗学や産業史など歴史的資料の保存にも尽力し、仲間と蒐集した膨大な資料は、現在では国文学研究資料館、国立民族学博物館などで広く公開、活用されています。

敬三は学問に関する基本的な姿勢として「論文を書くのではない、資料を学会に提供するのである」と言い、その延長線上に全68巻の「渋沢栄一伝記資料」の完成があり、渋沢栄一の重要な資料として多くの人々に活用されています。

昭和10年（1935）癌研究会理事会※

経済人としての敬三

渋沢栄一の後継者となっていた敬三は、大学卒業後に横浜正金銀行に入行し、ロンドン支店勤務を経て、大正15年(1926) 30歳の時に第一銀行に移り取締役に就任しました。その後36歳で常務取締役、45歳で副頭取に昇進、東京貯蓄銀行、東洋生命の取締役にも就任し、45歳で全国貯蓄銀行協会の会長を務めるなど諸企業、団体の役職も引き受けていきました。

昭和17年（1942）、46歳で日本銀行（以下日銀）副総裁就任を政府から要請されます。敬三自身は日銀に行く野心は毛頭なく、第一銀行も大事な跡取りを取られるなどと大反対しましたが、当時の権力に押されやむなく受諾しました。そんな中、敬三の母敦子だけは「第一銀行の頭取になるのは親の七光りであるけれども、祖父が亡くなって10年以上たって突然日銀に迎えられたことは、単なる親の七光りではない」と涙して喜びました。しかし、戦争の影は濃さを増し、当時の日銀は物価安定などの金融政策を実施するのではなく、役員の任命権は全て政府が握り、戦争に支弁するための資金の融通を政府の意向に沿って行うことが使命とされていました。金融統制会の実質的な責任者ともなり、その中には金融機関を合併させ、金融システム全体を整備することも任されました。

昭和19年（1944）日銀総裁に就任、谷口副総裁と※

敬三は第一銀行を三井銀行と合併させる大仕事を担っていました。昭和18年（1943）に合併が実現し新銀行名は帝国銀行となりました。祖父の興した第一銀行の名前が消える合併に際し、敬三はどんな気持ちで職務にあたっていたか残されていませんが、時代の要請に従って、淡々と果たしていたように見えます。その後、昭和19年（1944）日銀総裁となり、終戦を迎えます。

昭和18年（1943）来日中のチャンドラ・ボースと※

戦後、公職追放が解除された後は、国際電信電話株式会社初代社長、株式会社文化放送会長などを歴任。また、国際商業会議所東京総会運営会会長に推され、パリの常任理事会や東京大会の開催に尽力するなど、国際的に活躍しました。大正、昭和を通してまさに日本を代表する超一流の財界人として評価されています。

昭和29年（1954）ICC（国際商業会議所）本部会議予算委員会日本代表として※

大蔵大臣としての敬三

昭和20年（1945）、敗戦後の幣原喜重郎内閣の組閣に際し、幣原に説得された敬三は戦後の混乱の中、大蔵大臣を務めました。大蔵大臣としての敬三は、預金封鎖や新円切り替えの実施、財産税の導入、財閥解体など日本経済再建のために極めて重要かつ大胆な施策を行いました。財産税は申告制であるため、いろいろ抜け道もありましたが、敬三は自分が大蔵大臣の時に発した臨時財産調査令に基づいた課税のため、すべてを申告しました。

敬三長男の雅英は「三田の家の物納などの問題にしても、やり方によってはもっとうまく立ち回ることができたに違いないし、他にもそういう例が数多くあった」と述懐しています。財閥解体についても、渋沢同族株式会社は各社ごとの保有株式が非常に低く、他の財閥のように発行済株式の過半数を保有することはなかったため、解体に値せずの議論もあるなか、敬三はあえて抗わず粛々と資産処分を実施し同社を解散しました。雅英は父敬三についてこう評しています「父の特徴と言えるのは、そのどれについても一言の文句らしい文句も言わず、すべてを受け入れ、与えられた環境の中で、常に最善を願って努力し続けていたことである」。

「中の家」にて（渋沢栄一記念館所蔵）

渋沢家の略家系図